

## 令和7年度入学試験問題

## 小論文

(後期日程)

地域資源創成学部

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は7ページあります。
3. 解答用紙は2枚あります。すべての解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
4. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入してください。
5. 下書き用紙が1枚あります。
6. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁及び汚損等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせください。
7. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りください。

以下の文章は、アーリック・ボーザー著・月谷真紀訳『Learn Better』(英治出版、2018)の一部を抜粋し、第1部・第2部に改変したものである。この文章を読み、問1～6に解答しなさい。

## 第1部

数年前にニューヨーク市内の女子校で、ある実験が行われた。そこかしこの壁にかけられた十字架がいかにも重々しく厳格をかもしだしている、歴史あるカトリック系の学校だ。被験者となったのは高等部の1年生と2年生、ポロシャツとプリーツスカートの制服を着た十代の少女たち。研究協力を同意すると、ささやかな謝礼がもらえることになっていた。

実験の一つが、ダーツの遊び方を初めて教わることだった。研究を実施した2人の心理学者は女子生徒たちをグループ分けした。一つめのグループを「チーム・結果がすべて」と呼ぼう。このグループは遊び方として、ボードのできるだけ中心を狙ってダーツを投げるよう指示された。つまり点数を獲得しさえすれば勝てると教えられた。

心理学者はもう一つ、「チーム・学習メソッド」というグループを作った。そのグループには、ダーツの遊び方をまったく違う形で教えた。技術を身につけるプロセスに集中させたのだ。少女たちはまず、ダーツの正しい投げ方に取り組み、「腕を体から離さない」などの基本をマスターする。そしてある程度うまくなったら、的を狙って投げてごらんと促される。プロセス目標からの<sup>(1)</sup>的に当てるという成果目標へと、時間をかけて移行したのである。

そして、3つめのグループも作られた。このグループには、ただ「ベストを尽くせ」とだけ指示した。つまりこのグループがどんなやり方でダーツの遊び方を覚えるかは本人たちにまかされた。このチームを、「チーム・一般常識」と呼ぶことにしよう。

この実験について詳しく知ろうと、私は心理学者のバリー・ジーマンと一緒に研究を実施した、アナスタシア・キトサントスに会った。実験が行われてからもう何年も経つのに、キトサントスは今もジョージ・メイソン大学の研究室にダーツを保管していた。雨の降る午後、彼女は研究室のキャビネットから小さな黄色い矢を

取り出し、まるで忘れられた南米の原住民の貴重な遺物のように並べて私に見せてくれた。

キトサンタスがダーツを手放せないのは、研究が予想を超える結果を示したからだ。実験が終わってみれば「チーム・学習メソッド」の生徒の成績は群を抜いており、<sup>(2)</sup>「チーム・一般常識」の倍近い点数をたたき出していた。しかも彼女たちは実験をはるかに楽しんでいた。「実験が終わってからもダーツをもっと教えて、と私に言ってきた子たちがいるんですよ。何週間もせがまれたわ」。キトサンタスはそう話してくれた。

ダーツの実験からわかったことは単純な事実だ。裏づけとなる研究も続々と出てきているが、学習とはつまり理解のプロセス、メソッド、体系なのである。学習とは一つのことへの集中と計画性と内省をともなう活動であり、学習の方法がわかれば習得の度合いと効果は大きく上がる。

現に、学習のプロセスは、学習の達成度を予測する最も重要な手がかりの一つであることがわかっている。ある最近の分析では、分野を問わず学習メソッドが成果を大きく左右することが示された。別の分析では学習のプロセスがGPA〔学生の成績評価値〕と連動することが明らかになった。キトサンタスとジマーマンが継続して行った調査では、他の分野でもダーツの実験と同じ結果が出た。バレーボールから作文まであらゆるものにおいて、学習プロセスに力を注いだ方が成果が高くなることが分かったのだ。

(中略)

学習そのものに着目したアプローチは、誕生してまだ20年ほどにすぎない。長らく学習能力は知性の問題であるというのが専門家の通説だったため、本格的な研究がなされてこなかった。学習のスキルは生来備わっているものだろうと考えられていたのだ。知性——ひいては習得する能力——は目の色が青いのと同じ、遺伝によってもたらされた、後天的には変えられない特性とされていた。

教育現場も学界の考え方に追随したため、何年も学校に通って教育を受けても大半の人が学習の方法を学んできていない。一般的に言って、ある分野やテーマの専門知識を深めるにはどうすればよいか、私たちはよくわかっていないのだ。<sup>(3)</sup>

(中略)

こと学習に関しては、研究による裏づけのない思い込みが多々まかりとおっている。最近私は国内の権威ある学習の専門家と共同で、スキルの身につけ方に関する一般人の知識について調査を行ったが、その結果に<sup>あ</sup>啞然とさせられた。自分は効果的な教え方と学び方の基本がわかっていると回答しながら、人がいかにして学習するかについてあやふやな感覚と間違っ<sup>た</sup>思い込みを抱いているアメリカ人が圧倒的多数だったのだ。

例えば、一般人の3分の2が生徒の頭の良さを褒めるべきと考えていた。しかし研究からわかっている事実はその正反対で、人は頭の良さよりも努力を褒められたほうが頑張<sup>って</sup>学習する。また半分の人は、これといった指導がなくても効果的な学習ができると回答していた。しかし相次ぐ研究で、学習は周囲の積極的な関与をとまなうプロセスであることが示されている。さらに、それを裏づける研究はないにもかかわらず、8割以上が、手を動かしたほうが覚えやすい、あるいは視覚に訴えたほうが覚えやすいなど、人によって適した学習スタイルがあると信じていた。

## 第2部

ジェイソン・ウルフソンがレゴブロックを組み上げて作った作品がいったいくつあるのか、本人にもわからない。レゴのドラゴン、レゴの飛行機、羽の長さが15センチメートルもある巨大なレゴの<sup>が</sup>蛾。自宅の地下室に立つ彼は何十体もの作品に囲まれている。箱の中、小さなビニール袋の中、ウルフソンの前にあるテーブルの上にもまだまだ作品がある。——作りかけの月着陸船、ピサの斜塔、カウボーイ——すべてレゴ製だ。

完成した作品もある——レゴブロックを巧みに駆使した大型の作品群は、アンディ・ウォーホル風にも見えるし、いかにも玩具らしいとも言えるし、ファンタジーを現実の世界に出現させたようでもある。レゴ製の心臓模型など、制作中の作品もある。四方の壁、床の上、天井にまで届かんばかりに積んであるのは、ウルフソンが使う何万個ものブロックだ。

「あっ、この隕石なんか最高ですよ」。ウルフソンはビニール袋から小さな灰色の隕石のパーツをつまみ出し、貴重なダイヤモンドででもあるかのように手のひらに載せて私に見せた。

(中略)

最初のうちウルフソンの話は、地下室で記者に語るにふさわしい、かわいらしく微笑ましいものに思えた。だがその物語は彼の情熱の核であることがわかってきた。この物語こそがウルフソンのレゴ作品に価値を与えていた。実質的な何か、意味のある何かを。

ウルフソンが思い入れを持っていたのは、小さなプラスチック製ブロックの塊そのものではない。犬がかじったレゴを入れた古い箱には彼は見向きもしなかった。ブロックを使って自分の手で作りあげた、お気に入りの小説のワンシーンや大好きなテレビ番組でおなじみの電話ボックスに、彼は目を輝かせていたのだ。

私たちには多かれ少なかれ、ウルフソンのようなところがある。(中略)レゴに燃えるような情熱があるわけではなくても、私たちは誰でも心の中で特定の意味のフレーム越しに世界を見ている。自分が価値があると信じる活動に従事しているのだ。

学習において、この考えはきわめて重要だ。何であれスキルを習得するうえで、モチベーションは最初の一步である。意味があると思えないことを学ぶのは難しい。価値の評価がいかにモチベーションの原動力となるかの考察から始めよう。

意味が重要な理由はもう一つある。理解の第一歩だからだ。専門知識に自分とのつながりを作るとき、私たちはその意味を理解し始める。

(中略)

意味の価値は脳にルーツがある。私たちの心は豊かで複雑な存在であるが、物語の語り手のようなものとして活動している。私たちはたえず映画監督のように、何らかの物語、何らかの理解、何らかの意味を創造しているのだ。例えば初めて入る部屋に足を踏み入れたら、あなたはすぐにその部屋の用途を説明する、意味を含んだ物語を組み立てるはずだ。磨き抜かれた長いテーブルのある広い部屋であれば「会議室」と考えるかもしれない。床にバーベルが転がっていれば「ジム」と。

同じことが、二次元の世界でも目の錯覚という形で起こる。目の前の絵に描かれているのが若い美女であれ老女であれ、いずれにせよ私たちは必ずその画像に何らかの意味を読み取っている。意味のないでたらめな線の集まりでは決してないのだ。

これは単なる認知の癖と片づけられるものではない。意味は私たちが創り出さな

くてはならないものだからだ。人は世界に自分なりの意味を見いだす。意味が視点、  
フレーム・オブ・マインド  
物事のとらえ方、思考態度を決める役割を果たし、何かをすばらしく重要なものにも  
すれば無に等しいものにもする。もっと率直に言えば、価値が学習意欲の究極の  
燃料なのだ。意味の力によって、知識を得ようというモチベーションが湧く。<sup>(4)</sup>

(中略)

こと学習に関しては、意味のほうで私たちを見つけてくれるわけではない。意味を私たちが自分で発見しなければならない。

統計を例にとろう。データ分析が強力なツールであることに疑問の余地はない。今の時代、銀行業務、医療、スポーツマネジメントなど、多くの分野で統計の基本がわかっていないと成功が見込めなくなっている。

ところが一般的に言って、統計学をマスターしたいという欲求は生来備わっているものではない。回帰分析が複雑だからにせよ、統計学の教え方がたいてい無味乾燥だからにせよ、大半の人は、統計コードを眺めたりヒストグラムを作成したりしたがない。

ヴァージニア大学の心理学教授、クリス・フルマンはこの一般人の苦手意識をよくわかっていた。彼は自分が研究者として使うコンピュータにはすべて、「R」や「Stata」のような統計プログラムを入れている。データ分析を駆使しなければ、研究論文の発表は基本的に不可能だ。

その一方で、フルマンが教えている心理学専攻の学生たちのほとんどが、相関係数の話が出たとたんにも不満の声を上げる。多くがぼやき、なかには泣き言を言う者もいる。教え子たちにとって、統計学はつまらない、つまり、自分の生活には何の関連性も価値もない、苦痛で退屈なトピックに見えるのだ。

フルマンは大学時代、オフENSIB・ラインマンとして全米大会にも出場したアメフト選手だった。スポーツ経験の長い者ならでは、エネルギーで前向きな姿勢は今も変わらない。そこで数年前、彼はこの問題に挑んでみよう、統計学に学生の関心呼び覚ましてみよう<sup>(5)</sup>と決意し、何人かの心理学専攻の学生に、統計学と自分の生活との関連性について書かせてみた。

フルマンと共同研究者たちは、学生たちにデータツールの価値を見いださせる狙いで、学生たちに次のようなお題を出した。自分の生活で統計学を使うシーンを想

像できますか？ 看護師、営業マン、管理職という職業に就いて統計学を使う自分を想像できますか？ 学生たちはノート1～2ページほどの短いエッセイを書いた。

成果は歴然としていた。自分の生活と統計学の関わりを意識することで、学生たちの勉強へのモチベーションは大幅に上がった。成績がC平均からB平均へと一段階上がった学生もいた。要するに、統計学が自分の将来の職業、趣味、いつか築く家庭にとってなぜ大事かを説明する行為によって、学習のレベルが一足飛びに向上したのである。

これをきっかけに、フルマンはさまざまな状況で同様の取り組みを始めた。高校生に自分の生活にとっての科学の価値、なぜ自分にとって科学が大切なのか、短い説明を書かせた。また研究者のジュディス・ハラキエヴィッチと協力して高校生の保護者にパンフレットを配布した。科学がキャリア形成にどう役立つかを子どもたちと話し合い、親が子どもに科学の宿題には意味があると思わせる方法を提案するものだった。

もちろん、意地の悪いコメントをしたための高校生も少しはいる。「時間の無駄じゃん」と、反感をあらわに書いてきた者もいた。だがほとんどの生徒はまじめに取り組む。企業に就職したら数学がこんな形で必要になるかもしれない、と書く生徒もいれば、私生活でこんなふうにはスキルが役に立ちそう、と綴る生徒もいる。スキルが身につくこと自体が楽しい、と多くの生徒が書いている。

ある日の午後、フルマンと話をした。価値があるという感覚を創り出す方法はたくさんある、とフルマンは言った。報酬、目新しさ、背景情報——個人的に意味があるという感覚を創り出す際にはいずれも効果がある。そう考えると、自発的なモチベーション——生来の関心——はそれ自体が一種の価値だ。私たちが何かをするのはそれをしたいからだ。だが、ある対象について学ぶ意欲を持つには、その対象が自分に関連性があると思わなければならない、とフルマンは言った。

問1 「プロセス目標」とあるが、ダーツの実験において、「チーム・学習メソッド」<sup>(1)</sup>というグループのプロセス目標とは何か、20字以内で説明しなさい。

問2 「「チーム・学習メソッド」の生徒の成績は群を抜いており」とあるが、その<sup>(2)</sup>要因を本文に則して、90字以内で説明しなさい。

問3 「一般的に言って、ある分野やテーマの専門知識を深めるにはどうすればよ<sup>(3)</sup>いか、私たちはよくわかっていない」のはなぜか。50字以内で説明しなさい。

問4 「学習意欲の究極の燃料」と同じ意味の表現を、文中から10字以上15字以内<sup>(4)</sup>で抜き出しなさい。

問5 フルマンが、「何人かの心理学専攻の学生に、統計学と自分の生活との関連<sup>(5)</sup>性について書かせてみた」のはなぜか。そしてそれはどのような効果をもたらしたか。140字以内で説明しなさい。

問6 この文章を踏まえて、学習する上で重要なことは何か、300字以内で論述しなさい。

※なお、この小論文試験は、論旨の明確さや言葉の正確さ、あるいは文章の論理性を見るためのものであり、思想、信条、意見の方向性などは評価に関係しない。